

諧謔と風刺の館

——小栗虫太郎『黒死館殺人事件』論

一 『黒死館殺人事件』とヴァン・ダイン——その関係

小栗虫太郎の小説『黒死館殺人事件』は、『新青年』（一九三四年四月〜一二月号）に連載され、翌年五月に新潮社から刊行された。この作は、探偵法（のりみ）水麟太郎を主人公に据えたシリーズ五作目の作品であり、「豪壮を極めたケルト・ルネサンス式の城館」での連続殺人事件の解決までの顛末が語られる、シリーズ初の長編小説でもあった。その反響は凄まじく、小栗本人も、単行本化に際し付された「著者之序」において、「本篇が『新青年』に連載中は、褒められるにも、誹られるにも、悉く最大級の用語を以つてせられた」と述懐している。

発端は、「通称黒死館と呼ばれる降矢木の館」に住む「門外不出の弦楽四重奏団を形成してゐる四人の異国人」の「第一提琴奏者」であるグレーテ・ダンネベルグが毒殺されたことであつた。物語冒頭、支倉検事からこの知らせを聞いた法水は、

「悠つくりしようよ支倉君、（中略）大体、いつぞやのケン

松田祥平

ネル殺人事件——あれでは、支那古代陶器が単なる裝飾物に過ぎなかつた。所が今度は、算哲博士が死蔵してゐる、カリング朝以来の工芸品だ」（序篇）

というように、降矢木家に関する注釈を開始する。

ここで注目したのは『ケンネル殺人事件』という名前である。これは一九三三年にアメリカで刊行された、探偵小説作家ヴァン・ダイン（S. S. Van Dine）の作品の一つだが、作中ではこの後も彼とその作品への言及は、八度ほど見られる。^①

連載二回目の『新青年』には、江戸川乱歩、甲賀三郎による期待が綴られた記事が併載されており（後に詳述）、ここでは両名共に作風の類似という観点からヴァン・ダインに言及しているが、以来、多くの論者が小栗及び『黒死館』とヴァン・ダインとの関係について語ってきた。本論は中でも乱歩の「日本探偵小説の系譜」（『中央公論』一九五〇年一月）に注目し、小栗の「奇怪」なヴァン・ダイン受容という乱歩の指摘（後に詳述）を手掛かりに、『黒死館』とヴァン・ダインの関係を再検討してみたい。ではそのヴァン・ダインがいかなる作家であつたかをここで説

明しておこう。ヴァン・ダインは二〇年代後半から三〇年代末にかけて活躍したアメリカの探偵小説作家である。彼を論じる際に最もよく引き合いに出されるのはH・ヘイクラフトによる「なお戦前のままの地点に立ちどまっていた」^③アメリカの探偵小説が、彼の『ペンスン殺人事件』によって「一夜にして（中略）成年に達した」という言説だろう。こうした評価はH・D・トムソンが先立って行っており、彼もまた、「ポーは亜米利加探偵小説の為に余り立派過ぎる店開きをやつ」^④たが、以後八十年は停滞の時期で、「全く亜米利加の探偵小説の改良といふものは、ヴァン・ダインの出現に依つて始めてされたのだつた」^⑤と述べている。

ヴァン・ダインはデビューから三年ほどで邦訳され始め、高い人気を博したが、そのきっかけとなったのは森下雨村の紹介であった。雨村は一九二九年の『新青年』（一月）に、「探偵新作家現はる」と題して紹介記事を書いており、彼の小説は「在来の探偵小説の型を破つた頗る新し味に富んだもので、探偵小説界に一つの新しい衝撃を与えたものである」と述べている。また、「探偵小説漫談」（『東京朝日新聞』一九二九年一月一日朝刊）では「探偵小説は若い内にこそ面白いが、年をとつては」という「人達には若返り法のためにも最近のヴァン・ダインやウイルス・クロフツの作品をおすすめしたい」とも述べている。

雨村の紹介を経て、同年六月からは『新青年』に平林初之輔訳による「グリーン家の惨劇」^⑥が連載されることになる。同号の編集後記に当たる「戸崎町だより」には「本誌で紹介してから、丸善書店にはヴァン・ダインの註文が一番多く来るさうである」とあり、当時の読者のヴァン・ダインに対する期待の高さが伺える。

その後も需要は衰えなかったようで、『グリーン家』を皮切りに既刊が続々と翻訳され、それが完了してからは、原著刊行の一年以内には翻訳が出版されるといふような状況が続いていく。

しかし、それらが全て傑作として遇されていたかといえれば決してそうではない。ヴァン・ダインはその生涯に一二の長編を残しているが、彼の作品は後半になるにつれ、銜学趣味ばかりが目立ち完成度が低くなるとされ、本人が「一人の作家に六つ以上の探偵もの立派な想があるかどうか私は頗る疑はしく思つてゐる」^⑧と記していることから、前期六作のみが優れた作品であると見なされた。この理解はヴァン・ダインの没後まもなくに形成され、現在ではヴァン・ダイン評価の定説になった観がある。

そして、評価が高い前期六作の中でも、『グリーン家殺人事件』と『僧正殺人事件』の二作は、探偵小説全体の中でも傑出した作品であると評された。『新青年』新春増刊号（一九三七年二月五日）に掲載された「海外探偵小説十傑」という周知の企画は、それを具体的に示す資料である。これは二六人の作家、評論家がそれぞれ海外探偵小説のベストテンを上げたものだが、それによれば『グリーン家』が七六点（第一位に一〇点、第二位に九点とつけていき、二六人分を合算——松田注）で四位、『僧正』が五八点で八位であり、二作品ランキングさせている作家は彼のみである。

この企画には小栗も参加しているのだが、

- 一、水晶の栓 ルブラン／二、僧正殺人事件 ヴァン・ダイン／三、赤毛のレッドメイン フィルポツツ／四、八二三
- ルブラン／五、グリーン家の惨劇 ヴァン・ダイン（以下略）

というように、『僧正』と、『グリーン家』を二位と五位に置いて
いる。

このようにヴァン・ダインは人気、評価ともに高かった作家だけに、それに影響された作家も多かった。乱歩は一九三九年四月に亡くなったヴァン・ダインに対し、同年の『改造』六月号に「ヴァン・ダイン回顧」と題した追悼文を寄せているが、それには「甲賀君は主として評論によつて、浜尾君は作品によつて、ヴァン・ダインを祖述したかの観があり、「この外にも、ヴァン・ダインの影響を受けた作家は少くないと思ふが、浜尾君についてその色彩の濃厚であつたのは、初期の小栗虫太郎君」であつたとある。言うまでもなく『黒死館』は「初期の小栗」の作品だが、では、果たしてどのような影響がみられるのか。そこに行く前に、次章では小栗及び『黒死館』とヴァン・ダインの関係について言及した先行論を確認したい。

二 『黒死館殺人事件』とヴァン・ダイン——先行研究

まず、一章でも触れた「江戸川乱歩、甲賀三郎による期待が綴られた記事」について具体的に見てみよう。前者は「『猟奇耽異博物館』の驚くべき魅力について」(『新青年』一九三四年五月)で、「この作者程勇敢にペダントリイに陶醉したものは、その類例がな」く、それが小栗の作風における「最大の長所である」とし、同じく術学的な作風を持つ作家としてE・A・ポー、G・K・チェスタトン、そしてヴァン・ダインの名を挙げ、彼ら三人をして「小栗君の足元へもよりつけない」と述べている。後者は

「昂奮を覚える」(同前)で、小栗の「考証の広さは到底ヴァン・ダインの及ぶ所ではない」と言っている¹²⁾。

後に乱歩は「日本探偵小説の系譜」(前述)で、単なる類似の指摘から歩を進めて、小栗のヴァン・ダイン受容の独自性に言及している。乱歩は、小栗のヴァン・ダイン受容を「浜尾四郎のような正常な形ではなくて、きわめて奇怪な形で」あつたと総括し、小栗の場合、「名探偵の性格や、謎の構成、ペダントリイに至るまで、一見ヴァン・ダインに似てはいたが、よく見ると、それはまるで違つたものであり、ヴァン・ダインが「あくまで合理主義者であつたのに反し」て、「すべてにおいて超合理主義で」、「謎解きに狂人の論理が加味され」ていたと述べている。乱歩は「本格探偵小説の二つの変種について」(『新青年』一九三四年一月)で既に、小栗のトリックは「余りに抽象的論理の所産に過ぎ、余りに夢幻的、非現実的であり、理化学トリックの場合では、余りに御詠へ向きな子供っぽい機構である為に、具体的記述の照射に耐へ得ない」と述べているが、これは「超合理主義」、「狂人の論理」に直結する指摘である。一方、ヴァン・ダインのトリックは合理的なものなので、その違いに対して、「奇怪」を見出ししているのであろう。

このように乱歩によつて小栗とヴァン・ダインとの関係が単なる模倣ではないことが指摘されたが、これとは違つた観点から『黒死館』とヴァン・ダインとの関係に単純な模倣以上のものを見出したのは、柘植光彦、横井司であつた。

柘植は「小栗虫太郎『黒死館殺人事件』——怪奇——」(『国文学解釈と鑑賞』一九七三年二月)において、「子供五人の相競争

いである点、遺言で子供たちが館から出られない点」などを挙げ、「『黒死館殺人事件』は、大筋としては『グリーン家殺人事件』の完全なパロディであり、「メーン・テーマの親殺しも」、「伸子は自分を認知しなかった実父を殺すが、アダは自分を籍に入れた養母を殺す」という点で、「裏返しのパロディ」であるとしている。しかし、パロディというのは「既存の作品の（中略）特徴を模して、全く別の意図のもとに滑稽や風刺、諧謔、教訓などを目的として作りかえた」（『日本国語大辞典』）ものだが、柘植論では『黒死館』は『グリーン家』に似ている、としか述べられておらず、「滑稽や風刺」等について言及されていない以上、パロディのラベリングは尚早であると言わざるを得ない。¹³

こうした柘植の指摘を受け、横井は「語る／語られるものとしての推理」（『現点』八号、一九八八年）で、『黒死館』に『ケンネル』が引用されていることから、その「影を作品の背後に見出し」ており、また、法水による「心理分析^{ラシヒョウリナセ}」という宣言や、第二篇で田郷真斎を算哲自殺事件の犯人に擬して恐喝した点が、「直接証拠が真犯人を決定するものではないことをいうために、仮定を組み立てたそばから崩していく『ベンスン殺人事件』」でのヴァンスとマークとの「やりとりを思い出させる」とし、「とすれば、何も『グリーン家殺人事件』に限ることはなく、『黒死館殺人事件』がヴァン・ダインそのもののパロディだといえなくはないだろう」と結び、その証拠として小栗が「ファイロ・ヴァンスを揶揄するようなコント（中略）（『オツカルトな可怖かなくない話』『オフエリア殺し』春秋社、昭10・8）」を書いている事実を指摘している。しかし、横井論もまた、『黒死館』に「滑稽

や風刺」等が見られるか否かをなおざりにしており、「パロディ」という語を不用意に用いているのは柘植論と同様である。

三 『黒死館』の設計図

——『黒死館殺人事件』とヴァン・ダイン、再検討

本章では『黒死館』とヴァン・ダインの関係を明らかにする下準備として、まずは横井の「ヴァン・ダインそのもののパロディ」という指摘を手掛かりに、『黒死館』とヴァン・ダイン作品との比較検討を行なっていく。その際、『黒死館』連載開始時を一つの区切りとして、一九三三年に出た七作目の『ドラゴン殺人事件』までを比較対象としたい。『ドラゴン』は、翻訳も連載開始前の一月に出ているが、八作目の『カシノ殺人事件』は原著の刊行が一九三四年九月、翻訳が一二月なので、仮に小栗が九月の段階で原著を読んでいたとしても、時間的に『黒死館』と関係付けるのは難しかったと思われる。

比較検討に入る前に、まずは『黒死館』の梗概をまとめておく。過去に降矢木当主たる算哲の奇怪なる自殺を含め、三つの動機不明の変死事件が起こった黒死館で、またも殺人事件が発生する。ダンネベルグ殺害の知らせを受けて館に赴いた法水らは、事件解明に動き出すのだが、続けて給仕長の川那部易介の死体と、凶器を握ったまま失神している紙谷伸子が発見される。そして、館の調査、住人らへの訊問が繰り返されるが、訊問の中で法水は詩句の解釈を駆使して、心理を分析し、館から消えた押鐘津多子の存在を看破して、その所在をも明らかにする。ここで事件の一

日目が終わる。二日目、法水はクリヴォフを犯人として指摘するも、彼女が狙撃され、重症を負ったことでこの説は取り下げられる。その後も調査は続き、法水は襲撃の件を彼女の自作自演だと推理することで、再びクリヴォフ犯人説を提出する。ところが彼女が演奏会場で殺害されてしまい、またもこの説は敗れ去ってしまう。その後、演奏会場に姿の見えなかったレヴェズの方角が捜索され、彼もまた死体で見られる。法水によって今度は降矢木旗太郎が犯人に指摘されるも、翌日には、紙谷伸子が射殺されてしまう。法水は、彼女の葬儀の場で、いよいよ最後の推理を述べる。彼女の死はトリックを用いた自殺であり、犯人は伸子であった。

さて、『グリーン家』との比較論は既に紹介したが、『僧正』に關しても、柘植や、高山宏（「法水が殺す」「ユリイカ」一九八七年九月）が、見立て殺人という趣向に影響を見出している。他にも一つ、『僧正』に關しては興味深い趣向の類似があるので、まずはそれを指摘しておきたい。それは、書物に犯人の名前が記載されていたという趣向である。

梗概でも記したように、法水が初めて犯人を名指したのは、事件二日目のことであった。第五篇において、法水は「被害者の名も、犯人の名も」「リユツエルン役の戦死者中に現はれてゐる」と語り出し、ある本の「終末に近い頁を指し示す。そこには「輕騎兵ニコラス・ブラーエ」によって狙撃された者がリスト化されており、ダンネベルグ、セレナ、レヴェズの名（黒死館の楽師達と同名）が記載されていた。そして、法水はニコラス・ブラーエの本名がクリヴォフであることを明かし、彼女がこの事件の犯人

であると指摘する。

一方、『僧正』であるが、ディラードが、連続殺人犯「僧正」の正体は養子のアーネッソンであると、イブセンの本を用いて仄めかした直後の場面を見てみよう。仄めかしを察知したヴァンスは、イブセンの「僭奪者」の（中略）登場人物」を指し示すのだが、そこには「ニコラス・アーネッソン オスローの僧正」（武田晃訳『僧正殺人事件』改造社、一九三〇年九月）と記されていた。「僧正」という自称はつまりイブセンを好むアーネッソンがここから採ったものだと言うのである。

このように、書物に犯人の名前が記載されていたという趣向も『僧正』に原型が見いだせる。ただし、四人の楽師達は、実は「犯罪素質遺伝説」の実験のために呼び寄せられたのだが、ただ一人「遺伝素質」のないクリヴォフにはあえて暗殺者の名前が付けられたというのが真相であり、彼女は犯人ではなかった。『僧正』においても、これはアーネッソンを犯人に陥れようとする真犯人ディラードの詭計であった。つまり、両方とも記載されていた人物が真犯人ではなかったという点も共通しているのである。相違は、探偵がそれをどう受け取ったかにあり、法水がクリヴォフを犯人だと見なしたのに対して、ヴァンスはこれをディラードの策略だと見抜き、犯人が彼であることを確信している。この違いは重要である。

続いて、『ペンスン』、『カナリヤ』との比較に移る。横井も言及している第五篇、クリヴォフを犯人に指摘した直後の法水の「心理的分析だ」という宣言であるが、ここで想起されるのは、ヴァンスが『ペンスン』において、犯罪探求に必要なのは「犯罪

の心理的動因の分析とその個人への適用」であり、「たつた一つの眞実な手が、りは心理的なものであ」(松本正雄訳『世界探偵小説全集 第二十卷』平凡社、一九三〇年二月)¹⁷⁾と主張するような、彼の手法である。また、『カナリヤ』でも、その手法は存分に發揮され、物語終盤、ヴァンスは容疑者達とのポーカールによって心理を分析し、その結果から、鉄壁のアリバイがあるかに見えた人物を犯人であると看破する。物理的に不可能ではないかとの説に対し、ヴァンスは「物的事実と心理的事実が矛盾する場合は、間違つてゐるのは前者」(平林初之輔訳『世界探偵小説全集 第十九卷』平凡社、一九三〇年一月)だと動じない。

このように、「心理的事実」の「物的事実」に対する優位が、二作の主題であつたわけだが、『黒死館』においてもまた、詩歌の唱え合い——「唱合戦」による心理分析が多用されるなど、心理分析により犯人を割り出す手法は、法水の宣言が端的に表すように確信の下に推進されているのである。

そして心理分析に関して更に踏み込むと、今度は『カプト虫殺人事件』の影が浮かび上がってくる。法水によれば、訊問における詩歌の引用は、「詩語には、特に強烈な聯合作用が現はれる」という「仮説」を「殺人事件の心理試験に」(第四篇)応用したもので、極めて戦略的なものであつた。その戦果として、津多子の存在が明らかにされることは梗概でも触れたが、当該箇所では、法水は詩句の言い間違いから巧みに心理を分析している。

訊問において法水が、詩句の一節を引用すると、真斎は「三たび魔女の呪詛に萎れ毒氣に染みぬる」(第四篇)で応えたが、彼は「三たび以後の韻律を失」い、しかも「Ban and thriceとを合せ」

「その Bantrice を口にした時に」顔色を失う。この理由を法水は、「Bantrice が、 Banshee (ハカテ伝説にある告死婆——原注)」のように響くからだだと分析する。続いて、法水による詩句の引用に対し、「短剣の刻印に吾身は慄え戦きぬ」で応えたセレナが、「sech (短剣)と云ふと狼狽の色」を見せ、「短剣の刻印」の「sech と Stempel (刻印)の間に不必要な休止を置いた」ことを問題にし、それは、「Sechs tempel (六つの宮)と響くのを懼れたから」であると述べる。それは「六つ目の神殿に入ると、入つた人間の姿は再び見られない」からであり、以上二人の反応から、法水は館から消えた六人目が津多子であることを明らかにする。

一方、『カプト虫』だが、被害者の甥であるソルヴィターが自身の行動を証言する場面に注目したい。ヴァンスは、ここで彼の証言が偽証であることを見抜き、さらにその偽証をもとに心理を分析し、彼の行動の詳細を明らかにしている。

ソルヴィターは翻訳を行つていたと証言するが、ヴァンスに嘘を見破られ、手紙を書いていたと証言を翻す。だが、彼はその内容までは明かさない。そこでヴァンスは、彼のついた嘘である、翻訳を試みたという三つの言葉、「Ankhet」^{アンケット}、「wash」^{ワッシュ}、「tema」^{テマ}(森下雨村・山本不二共訳『甲蟲殺人事件』新潮社、一九三一年二月)から推理する。これらの言葉は、エジプト語のありふれた三つの言葉から来たもので、「生者」^{アライブ}が君の「幸福」^{ウェルファート}又は「好运」^{グッドラック}を妨げてゐるといふ事を記し、さらにこの状態が「終るべき」^{テム}だといふ願望を付け加へた内容の手紙を書いていたのであつたといふのである。

このように、両者の心理分析は分析のもととなった言説が、詩句かエジプト語であるかという違いはあるが、とっさに出てきた言説から、しかも術学的な言説から心理を分析するという点で、殆ど同じ手法であるということが出来るだろう。つまり、あの「唱合戦」もまた、ヴァン・ダイン作品を原型とした趣向であると言えるのである。

心理分析の場面が『カプト虫』の影響の下に書かれているといふことだけでも、『黒死館』を語るに当たって『カプト虫』の影響は看過し得ないものがあるが、更に重要なことは、全体の構造にも影響が見て取れることである。その構造とは、通常の探偵小説の形式を逆転した構造である。

『黒死館』における犯人伸子は複数の事件で「完全に情況証拠の網の中にあ」（第八篇）り、早くから、しかも何度も支倉、熊城から嫌疑をかけられ、その都度法水によって救われている。第六篇中の、クリヴォフ狙撃後の訊問で「自分の不在証明を立てる事が出来な」い伸子は逮捕されそうになるが、法水はそれを引き止めてしまう。その後再びクリヴォフが襲撃され殺害されるや彼女への疑惑はいよいよ濃くなるが、しかし「冗談じゃない。あんな賤民の娘が、どうして、この宮廷陰謀の立役者なもんか」（第八篇）と法水はまたもこれを退けてしまう。結局、法水が真相を述べるのは、彼女が自殺をした後のことになるのである。

『カプト虫』においてもまた、カイル殺害の現場には、犯人ブリス博士の不利になるような証拠が露骨なほどばら撒かれている。しかしヴァンスは、犯人が自らの不利になる証拠をたくさん残しておくはずがないと述べ、逮捕に対して待ったをかけ続ける。

ところが物語終盤、ヴァンスは、ブリスが犯人であると「昨日の朝博物館へ入つてから五分と経たぬうちに僕には解つた」、「少くとも怪しまれた」と言つてのける。ヴァンスは、「彼に罪がないなど、云つた事も一度もない」はずだと言うのである。では何故逮捕を阻んだかといえ、ばら撒かれた証拠には全て抗弁が用意されており、その抗弁で無罪を獲得することがブリスの目論見であると見抜いたためであつた。ヴァンスは彼を有罪に結びつける証拠が発見されるまで、彼の逮捕に反対したのである。

このように両作品とも、ワトスン役が早くに目星をつけた、物的証拠などの点から最も疑わしい人物が実際に犯人であつたのだが、探偵は解決に至るまでこれを否定し続けるという類似した骨格を有しているのである。ただし、『僧正』との比較で指摘したような、探偵が真相を見抜いていたか否かという違いはここにもあらわれている。何故なら、『黒死館』と違って『カプト虫』では、探偵は真相を知りつつも、あえて迂回していたからである。残る比較検討の対象は『ドラゴン殺人事件』のみだが、この作品からの影響は端的に、犯人を比喩する「ドラゴン」の用法にあらわれている。

訊問で伸子は「顔の右側に、打ち衝つて来たものがあ」（第六篇）つたと証言する。熊城はそれは誰かと問うが、「化竜」に近づくのとは真平だと、伸子は証言を拒否する。また、第八篇で犯人に擬された旗太郎は、法水に対し、「この事件の恐龍と云ふのは、取りも直さず貴方の事だ」との言葉を吐く。そして、レヴェズの死体の咽喉に印されていた「父の指痕」に対し、「あの恐龍の爪痕は、一体貴方の分身なですか」と続けている。前者の「化竜」

は明らかに犯人を比喩したものである。後者の「恐龍」も、咽喉に残された拇指痕は死んだはずの算哲のものと同一であり、それを法水の仕業なのかと問うのだから、こちらも犯人扱いに等しい。これに対して、『ドラゴン』では、現場に残された足跡、死体の発見された場所、死体の状況等が、伝承上の生物であるドラゴンによる襲撃を思わせ、マチルダ・スタムの述べる「狂龍説」(伴大矩訳『狂龍殺人事件』日本公論社、一九三四年一月)が、説得力をもってあらわれてくる。『黒死館』における「ドラゴン」の使用はこれに触発されたものではないだろうか。であるならば、『黒死館』における小栗の目論見は、『ペンスン』から『ドラゴン』までのヴァン・ダインの全長編作品を『黒死館』に関係付けることにあつたと言えるだろう。

四 戯画としての法水麟太郎

本章ではいよいよ『黒死館』とヴァン・ダインの関係の「性質」に関して考察する。その上で、鍵となるのは法水の造形である。事件の解決までに法水は二度クリヴォフを犯人として指摘し、一度目は彼女が狙撃されることによって、二度目は刺殺されることよって、二度の「退軍」を強いられている。『黒死館』での法水は確かに誤謬を犯し、迷走する探偵であつた。このことについて考える前に、まずは、探偵の誤謬が描かれた作品の系譜をまとめておこう。

探偵の誤謬は、探偵小説の最初の長編と言われるエミール・ガボリオの『ルルージュ事件』(一八六六年)において早くも見ら

れ、例えばコナン・ドイルのホームズシリーズの中にも「黄色い顔」(二八九三年)のように、それが主題の作品が存在する。時代が下り、小栗が活躍した時期周辺になると、様々な作家が探偵の誤謬によって探偵の相対化を試み始めていて、例えばアントニー・パークリーの『レイトン・コートの謎』(一九二五年)や、エラリー・クイーン『ギリシャ棺の謎』(三二年)などはその典型例である。こうした世界的規模の探偵の相対化の試みの中で、『黒死館』において特筆すべきは、徹底した探偵の戯画化にあつた。

先述の通り、法水は事件を解決するまでの過程で少なくとも二度、決定的な過ちを犯しているのだが、その最初の過ちに着目してみると、まずは、法水が心理分析により間違える探偵として造形されている事実が明らかになる。

第五篇で、書物に犯人の名前が記載されていると述べ、クリヴォフを犯人として指摘した後に、法水はまたも詩句による心理分析から、ダンネベルグ殺害事件当夜におけるクリヴォフの行動を推理し、彼女の証言を詩集中の表現からの連想による創作だとした。こうしてクリヴォフの証言を分析し、己の勝利を確信した法水は「心理分析だ」という例の台詞を言い放ち、事件の解決を宣言する。しかしそれも、直後に彼女が狙撃されたことよって一瞬で崩れてしまった。これが「法水の歴史的退軍」の全容だが、そのように彼を敗北させたのは心理分析であつたということになる。

一章前章における『カプト虫』との比較の際、法水が仲子犯人説を、「賤民の娘」には相応しくないと退けていることは既に述べたが、『ペンスン』で語られるヴァンスの探偵法の核心——「美

術の鑑定家が、一つの絵画を解剖して、その作者、作者の個性と性質を告げ得るやうに、心理学の専門家も、一つの犯罪を分析して何者がその犯罪をなしたかを告げ得る」——から言へば、「作者」である伸子に対して「絵画」を描き得ないという誤信をしていることになるのだから、これもまた、心理分析による致命的な誤謬であつたということになる。

このように法水は、心理分析によつて確かに数々の事実を明らかにしてはいるものの、肝心の犯人の推理には失敗する探偵として造形されているのであつた。その意味では、法水はヴァンスと対称的な造形がなされているのであり、これこそはまさに『黒死館』がヴァン・ダインの本来の意味での「パロディ」であつたことを示す証拠であると言える。

心理分析による誤謬は法水がヴァンスの戯画として造形されていることを示しているが、これに加え、以下に例証する飛躍的な言辞や捏造による恫喝等においては、戯画化の対象は探偵という存在そのものにまで及んでいたことが明らかになる。

例えば、第二篇で法水は黙示図の読解に際し、天体の運動を援用するが、これを聞いた久我鎮子は「莫迦な理学生の話を憶ひ出し」たと嘲笑し、熊城も「まるで狂人になるやうな話」だと皮肉を返す。あまつさえ、基本的には法水を誉めそやす「筆者」ですら、法水の發言を、「宛がら狂つたのではないかと思はれ」たと評している。これに対して法水は巧みな論理展開によつて辻褃合わせをしてみせるが、その辻褃合わせの能力が脅迫行為にも転用されているという事実が目に向けた時に、法水の探偵行為は相当に胡乱な代物であることが發覺するのである。

法水は容疑者との駆け引きにおいて、度々脅迫的な言辞を用いているが、その中でも、第二篇において真斎に対して仕掛けた「生理拷問」と、第七編におけるレヴェズとの対決に見られた言辞に注目したい。前者は過去に起こつた算哲の変死を真斎の手によるものだとし、後者は一連の事件は恋愛関係（遺産相続の権利が剥奪される条件の一つ）が動機で、レヴェズによつて起こされたものだとし、いずれも本人を追及する場面なのだが、これらは「整然たる条理」（第二篇、第七篇）で捏造された物語（推理）による恫喝であつた。無論これらは事件解決のためという大義名分あつての行為であつたわけだが、とは言へ、物語を捏造してまで恫喝する法水の強引さには驚かされる。捏造の被害者達も口々に、彼の捜査法が危険なものであることを指摘して、レヴェズは、法水こそが「この事件の悪霊」だと吐き捨てているし、『ドラゴン』との比較の際に引用したように、旗太郎も同様に、法水こそが事件における最悪の存在なのだと彼を罵っている。

『黒死館』においては、探偵の誤謬によつて、推理という行為が相対化されているわけだが、加えて、このような、推理行為への冒瀆以外の何物でもない、捏造による恫喝という法水の不当な捜査法によつて、探偵の捜査行為もまた相対化されていることが明らかになった。従つて、この作は捜査、推理を合わせた探偵行為そのものを相対化しており、そのようなパロディックな方法で事件に取り組む法水は、探偵という存在そのものの戯画として造形されていると言えるだろう。

レヴェズとの対決が描かれた第七篇の最後に、法水は二度目の「退軍」を強いられることになるわけだが、そのような篇が、「法

水は遂に逸せり!」と題されている事実は、『黒死館』における法水が探偵そのものの戯画として造形されていることを端的に示していると言えよう。

このように、『黒死館』における探偵の誤謬は、捏造された物語(推理)による恫喝と一体になって、探偵行為乃至は探偵の戯画化に向かって作用している。心理分析での失敗は、法水がヴァンスの戯画として造形されている事実を示すものであるが、戯画化の対象はヴァンスのみに留まらず、探偵の誤謬や、恫喝による探偵行為の相対化によって、探偵という存在そのものにまで及んでいたのであった。

五 諧謔と風刺

これまで述べてきたところから、『黒死館』が高い批判性、ひいては自己批判性をも備えた戦闘的な作品であることが明らかとなったが、『黒死館』の目論んだことはこれだけに留まらない。

『黒死館』では、何度もヴァン・ダインとその作品に言及されるが、それ以外にも三章で確認したように、密かに彼の作品は取り込まれてもいた。ここでは、その二通りの関係がテクストにおいて果たしている機能について考えてみたい。

明示された関係には誰もが気付くが、隠された方はそうはいかない。ヴァン・ダインを読み込んだ者のみが、気付くのである。

明示された関係は上記のような特定の読者のための、隠された関係発見のためのヒントであったということになる。

『黒死館』には度々「読者諸君」に対して謎を強調し、解決を

促す語りが挿入されるが、このような読者との関わり方は、ヴァン・ダイン作品との対応にどこまで気付くことが出来るかという問いかけにも一貫している。『黒死館』は読者に挑戦しているのである。

これまで見てきたようなヴァン・ダインとの様々なつながりや、本論の四章で確認したヴァンスお得意の心理分析を用いての失敗などを見ても、『黒死館』におけるヴァン・ダインへの意識は非常に高度なレベルにまで達していることが結論される。

以上の考察によって、『黒死館』における批判精神に裏打ちされた数々の趣向が明らかになった。クイズ仕立てでヴァン・ダインへの傾倒を伺わせつつも、ヴァンスの方法を風刺的に描くことで、ヴァン・ダインを相対化してみせ、そして同時に、パロディ化された探偵行為を描くことにより、探偵という存在そのものをも相対化し、時として自己批判の領域へすら踏み込もうとする——『黒死館』はそのような諧謔性と風刺性に満ちた戦闘的なテクストとして捉えることが出来るだろう。

注

(1) 例えば、ベンゲル・クックの法水に対する皮肉として、「君は何時フアイロ・ヴンスになつたのだ」というように、ヴァン・ダイン作品における探偵の名が引用されたり、被害にあった人物が犯人に擬される際、捜査の目を欺くため自身も被害者を装った「グリーン家のアダ」の名が引用されている。

(2) 以下、一度紹介した作品に関してはこれと同様略称を用いる。

- (3) ここの「戦前」とは第一次世界大戦以前を指す。
- (4) Howard Haycraft “Murder for Pleasure” (一九四一年)
 (林峻二郎訳『娯楽としての殺人——探偵小説・成長とその時代——』国書刊行会、一九九二年三月)。
- (5) Thomson, H. Douglas “Masters of Mystery” (一九三二年)
 (広播州訳『探偵作家論』春秋社、一九三七年一月)。
- (6) 原題は“The Greene Murder Case”である。以下、このように特定の翻訳本を指すのではない場合、それぞれ最も流通していると思われる邦題を原題の代わりに用いる(この作品の場合は『グリーン家殺人事件』)。登場人物なども、引用内でない限り、同様に、最もポピュラーと思われる邦訳名を用いる。
- (7) 森下雨村・山本不二訳『甲蟲殺人事件』(新潮社、一九三一年一月)の刊行を指す。
- (8) それぞれ、『ペンスン殺人事件』(一九二六年)、『カナリヤ殺人事件』(二七年)、『グリーン家殺人事件』(二八年)、『僧正殺人事件』(二九年)、『カブト虫殺人事件』(三〇年)、『ケネル殺人事件』(三三年)、『ドラゴン殺人事件』(三三年)、『カシノ殺人事件』(三四年)、『ガーデン殺人事件』(三五一年)、『グレイシー・アレン殺人事件』(三八年)、『ウィンター殺人事件』(三九年)。
- (9) “I Used to Be a Highbrow. But Look at Me” (一九二八年)
 (小河原幸夫訳『半円を描く—短く自叙伝—』『新青年』一九三一年六月)。
- (10) 乱歩の「ブーン・ダイン回顧」(『改造』一九三九年六月)に

は、「彼の六篇以上は意味がないといふ考へは正しかつたのかも知れない。事実彼の作中五六篇は、探偵小説史上第一流の傑作と云ひ得るものである。その他の作品は書いても書かなくても、どちらでもよかつたのかも知れない」とある。

- (11) ここの言われている「祖述」、「影響」とは要するに模倣の意味であろう。

- (12) 甲賀は「ヴァン・ダイン以後に出た為に、恰もヴァン・ダインの模倣のように思はれるかも知れないが、もしさうだつたら、作者は大へん不幸だと思ふ」と続けているのであるが、このように、模倣ではないとしつつも名前が出されるところに、当時、いかに銜学^{ペンシトリア}「ヴァン・ダイン」という図式が根深くあつたかが伺える。

- (13) 同じく『日本国語大辞典』には、「英語の語源はギリシア語の *parodia* で、模倣の意」とあり、*parody* には下手な模倣や、猿真似という意味もあるが、無意味(こ)で問題となるのは日本における慣用的な意味である。

- (14) 『ペンスン』は、容疑者の殆どが「法律の要求する、時間、場所、機会、凶器、動機、とそれに行動等の条件を満して」おり、そのような物的証拠による推理の不正確さを示すため、それぞれ順に犯人に擬せられ、否定されていくという構造を有している。

- (15) 伴大矩訳『狂龍^{カウブ}殺人事件』(日本公論社、一九三四年一月)。
- (16) 伴大矩訳『賭博^{カジノ}場殺人事件』(日本公論社、一九三四年一月)。

- (17) 翻訳自体は、『探偵小説全集 第十三巻』(平林初之輔訳、

春陽堂、一九三〇年四月)のほうが早いですが、最終章が訳されていない。

た立教大学文学部、藤井淑禎教授に厚くお礼申し上げます。

(まつだしょうへい 大学院後期課程在學生)

(18) 当時の英和辞典を見ると、「dragon」には「暴烈なる人」
〔大英和辞典〕富山房、一九三一年三月) という意味もあるので、犯人に対して「ドラゴン」という比喩を用いるのは不自然ではなかったと思われるが、ここでは『ドラゴン』からの影響の方を重視したい。

(19) 数ある詩句による心理分析のうち、この場面は手法ばかりでなく、内容も、連想による虚言を見ぬくという点で同様であるため、先に示した『カブト虫』の場面に最も類似している箇所だと言える。

(20) 批判は無論、探偵小説作家たる自己(小栗)にも跳ね返ってくる。

(21) 例えば、第六篇には「読者諸君は、ダンネベルグの着衣の右肩に、一個所鉤裂きがあつたのを記憶されるであらうが、それにはまた、容易に解き得ない疑義が潜んでゐるのだつた」という記述があるが、このように、語りは度々「読者諸君」に対して、謎を提示したり、問いかけを行っている。

※『黒死館』本文の引用は、『黒死館殺人事件』(新潮社、一九三五年五月)に拠る。他の文献も含め、引用に当たって漢字は全て新字体に改め、ルビは必要と思われるもののみ振った。また、傍点等は省略し、改行を省略する場合は／を用いた。

※本研究を行うにあたり、ご懇篤なご指導とご高配を賜わりまし